

井藤実践の分析に参加して

中濃サークル 上村文隆

これは井藤実践のまとめではありません。あくまで上村の個人的な感想です。

私は井藤さんの実践を、数年前の会社実践の時からずっと楽しみにしていて、地区セミナーで分析の時は必ず参加することにしていました。そして、今回の実践は井藤さんが4月から報告をされていて、ドラマチックな実践だったのでとても楽しみでした。また、東海北陸地区セミナーだと岐生研とは異なった視点が出るのではないかという期待もありました。

全体会の討議の柱は、

「3人の成長にとって、クラブ（会社含）活動と生きづらさ研究会はどんな意味があったのか」でした。この視点で学べる点はとても多く、それだけ豊かな内容を含んだ実践だと思うのですが、ここでは全く違う観点から迫ってみたいと思います。

というのは、私たちの班で地多さんが最初に質問したことに刺激を受けてのことです。地多さんは6月までの生みの苦しみがあつたから、この実践が生まれたのであり、その後の展開は自然にそうなるもので、生みの苦しみの中からどういうきっかけでこの実践が始まったのかは重要なことだと提起されました。

1、井藤さんの実践の大きな変わり目は何だろう

『5班（愛知・チダ）

・4月にこだわりたい。4月にちょっとした笑顔があつたという話があつたが、管理的にやらない方法では、生みの苦しみが出てくる。予め取り締まるという前年までのやり方をせずに、子どもたちとの関係に任せてきたら殴り合いになってしまった。それをよくがまんしてやったと思う。

そのことによって底尽き感がうまれ、6月28日の憲法→生きづらさ研究会へと移行していったのだと思う。がまんできかないようなトラブルを、子どもたち同士の関係に任せてきたというその姿勢ややりかたはすばらしいと思う。

5月にナツオが、みんなに自分の特徴をいえばいいと思うと既に言っている そのことを見逃さなかったのは良かったという意見が班のなかで出た。』

最初、地多さんがなんで4月にこだわるのだろうと不審に思っていたけど、確かに6月までのクラスの子どもたちの大変な様子を思うと、決して管理的ではなく、でも子どもたちの様々なトラブルと付き合いながら、相談センターに電話をかけてまでも付き合っていた井藤さんの苦悩は並大抵ではないし、よくぞそれを我慢できたと思うのです。

ただ、地多さんは底つき感と言っているけど、ここはもっと大事にしなければいけないところだと思います。

生みの苦しみの中からどういうきっかけでこの実践が始まったのかはとても重要なことだと思うのです。

2、ルールが生まれる時

ほとんど無法地帯であった学級の中に、「いいクラスにしたい。そのためにはルールを作って守ればいい」という願いが出てきます。

この願いはどうして出てきたのでしょうか。

これを語ったダイは言っていないませんが、それまでのダイたちとの対話を大事にする井藤さんの姿勢がそれを生んだのではと感じます。

でも、ダイはなぜルールが必要だと言ったのでしょうか。

このことについて、私の実践とつなげて考えてみたいと思います。

ルールが生まれるのは、ルールが先にあるのではなく必要があるからです。

その必要はどこから生まれるのかというと、その場でそこにいる人たちが作り出すものです。でも、ボツブスのいう「自然状態」にあるクラスの中にどうやったらルールが生まれてくるのでしょうか。

レポートの中に詳しくは書いてありませんが、それはこの教室に来る子たちとの交流にあったのではないかと思うのです。

『・普通学級の子どもたちも30人集まったということ

・クラブは5個くらいできたが、今は10個ほどできている（3人でかけもち）

トランプ・おはじき、じよぎま、ボードゲーム、押し相撲、クイズ などなど』

家庭でも交流学級でもこのクラスでも様々なトラブルが起こり彼らは混乱しています。そしてこのクラスに来る子たちとも当然あるはずです。

この中で一番解決しやすいのが、クラスに遊びに来る子たちとのトラブルだと思います。

彼らに対する要求とそれをルール化することは、ルールを自覚し、ルールがトラブルを解決する手立てだということを経験していったと思うのです。

私自身は教室に遊びに来て好き勝手をする上級生にどう対処するのかということと一緒に考える中でルールの大事さを考えていきました。こういう場合に排除するという思考になりやすいのが学校という場ですが、そこからは何も生まれません。

また、学級へ来る子たちとのクラブやイベント大会などという発想は、学級内クラブ（会社実践）の実践など楽しさをいつも追求してきた井藤さんならではのものです。

3、井藤さんの感性

井藤さんの実践は楽しくていつもワクワクします。それは、井藤さんの楽しいことをやりたい（ただし自分だけではない）という願いが一貫しているからだだと思います。

では、その楽しさとは何でしょうか。自分の思い通りにいくことではありません。子どもたちが自分から動き出すこと・・・その中に楽しさがあると言っています。

こういう感性はどこから出てきたのでしょうか。そして、その感性と実践はどう結びつくのでしょうか。

私はそういう感性を磨くものとして、書くことの重要性をあげたいと思います。

最初の実践から井藤さんはレポートにしてみました。

レポートを書き続けてきたのです。それは感性だけでなく子ども分析や方針を立てることも要求してきます。井藤さんは書くことによって自分の実践を自覚してきたのです。

でも、書くことは実は大変なことです。

井藤さんの感性を支えているこの書くことにも私は注目してきました。

井藤さんに以前聞いたような気がします。具体的にはメモを取ったり、板書のように書いていると。

今回子どもたちとの話し合いを板書にしたのもその一つ。

こうやればその時の会話を再現しやすいのですが、もう一つ井藤さんには狙いがありました。それは、クラスに来る子たちへのアピールにもなるということです。

こうやって話し合ったことを公開し、相対化していくということをいつもやっているのです。こういう手法こそが身についた実践力となると感じます。

4、当事者研究について

さて、今回の研究会でもいくつかの新しい言葉と出会いました。こういう出会いが研究会の醍醐味でもあります。

今回であった言葉は、「当事者研究」。

たぶん以前に出会っているのですが、その時は心に残りませんでした。今回心に残り出会ったと感じたのは、もちろん井藤さんの実践があったからです。

この言葉は、ネットで見ると、「べてるの家」での実践から始まったようです。統合失調症など様々な障害とどう向き合ったらいいのか。他の人が、ではありません。当人がどう向き合うのかという一番大事なことを取り上げているのです。

特別支援の障がいをかかえた子どもたちとの付き合いを通じて、私自身が追求してきたことでもありました。

- ・当事者だから研究する。
- ・研究することで当事者でありつつ、自分自身を外在化していく。
- ・外在化することで自己のコントロールを放棄していく。

ここまでくると真宗の「他力の思想」と重なってきます。

自分をコントロールするために研究するものではありません。

井藤さんがテーマに選んだことば『「当たり前」より「あるがまま」—生きづらさを眺めてみると—』を読むと、Total（あたりまえ）とWhole（あるがまま）という言葉が浮かんできます。

最後に、私の最後の教え子M君が最後に書いてくれた連絡帳に書いてあることを紹介します。

『今日は数学の時間に上村先生におしえてむらうさいごの数学で上村先生一年かんおしえてむらいました。上村先生にが僕におしえてきて僕がわかったことはただ1つだけしっかりわかったことがあります。（人はバカだ。それをしている人がほんとの天才だ）これを一年中かけて解ったことでした。』

これを読むと今でも泣けてきます。